



講演

## 「隠元一『万国の春』を心に一」

若木太一氏（長崎大学名誉教授）

### 一 隠元禅師と鄭成功

隠元禅師(1592～1673)と一行僧俗およそ三〇名は、日本暦の承応二年(1654)七月五日、長崎の港に到着した。この東渡には、逸然性融いつねんしょうゆうとその檀越らの三度(実は四度)の請啓に答えてのことであった。

隠元は当時六三歳、「人生五十年」といわれた時代、すでに十分に高齢であった。

永暦八年(順治十一)(1654)、五月十日、祖国の衆徒や諸檀越に別れを告げ、六月三日に厦門あもいに至り仙岩に宿寓した。当時、東シナ海は倭寇や海賊が横行して危険だったが、鄭成功(1624～1662)の船団によって護送された。鄭成功は側近の建国鄭公(鄭成功の従弟)を遣わし、仙巖に寄錫中の隠元禅師に齋金(仏に供える寄金)を送り届けた。

七月五日の夜、長崎港では灯火を掲げて隠元を迎えたという(『黄檗開山普照国師年譜』二巻本)。

隠元を迎えるために東明山興福寺の老宿黙子如定もくすにょじょう(1597～1657)と三代寺主逸然性融(1601～1668)および檀越・頼川官兵衛らは四度にわたって熱心な請啓を重ねた。二度目は路費百金・香帛など海賊に奪われて届かなかった。三度の請啓を受けて、当初は三年で帰国する約束で応諾したのである。しかし隠元は八十二歳まで日本に届まって生涯を終えた。いったいどのような運命が待ち受けていたのか。

翌六日、隠元はただちに東明山興福寺に進み、約一年余を過ごす。ここでは「初登宝地」と揮毫した。隠元禅師にとってこの東渡は、祖国明朝が戦争で消滅の危機にさらされており、心中に重く深い懊悩をかかえながらの旅立ちであった。

その歴史的背景には明・清争乱があった。崇禎十七年(1644)三月、明朝の毅宗は自殺した。北方女真族の清軍が南下し、李自成軍を破って北京を国都とした。それに抗して明朝の諸公らは福王(弘光帝)を立て、唐王(隆武帝)、桂王(永暦帝)を立てて抗清を続けたが、山海ともに兵戈に蹂躪され、命運なく明朝は壊滅に及んだ。

永暦八年六月二十一日、隠元禅師は厦門港を出発したが、航海中にも祖国で戦禍に苦しむ人びとを思い、深い懊悩におそわれていた。「東渡舟中夜懷」(『雲濤集』・『興福録』)と題する詩に「可憐人百諸侯国 未必完全得到今(憐れむべし八百諸侯の国、未だ必ずしも完全今に到り得ず)」と記す。隠元は東シナ海の荒波にさらされながら、憐れむべきは明国八百諸侯の国々ではないのか。仏のご加護と慈悲は人びとに十分に行き渡っていないではないか、と後悔した。いつぼう、約束した扶桑国での宣教にかける決意は翻せず、相反する心裡を正直に告白している。一輪の明月に禅心を照らされ、戦乱に苦しむ明朝諸侯や民衆を憐れみつつ故国をあとにしたのであった。

## 二「萬国の春」

承応三年の翌七月六日、長崎奉行も受け容れ、上陸した隠元禅師は多くの僧俗に迎えられて興福寺に登った。山門には隠元書の扁額「初登宝地／臨濟正伝隠元老僧書(右)／法孫悦峰章敬立(左)」の扁額が現存する。これは初登の記念で、「まさに宝地だ」と称え、「東明山」を祝福した言葉である。そして注目すべきは、興福寺に伝存する隠元書の三幅(巻軸)である。中央「慧日正東明」の両脇に「臨濟三十二世／黄檗隠元書」と署名する。

○鳥唱千林暁　　鳥は唱ふ千林の暁

○慧日正東明　　慧日　正に東明

○花開萬国春　　花は開く萬国の春

「東明山の夜が明けると鳥たちの囀りが深い森から聞こえてくる。東から日が昇り、天地を明るく照らし出す。あたり一面に花が開き、世界中に春が訪れる」と。「慧日」とは、日光が世界を照らすように、世の冥盲を照らす仏智をいう(『無量壽經』下)。隠元禅師の長崎滞在は、承応三年(1654)から翌明暦元年(1655)まで約一年間であり、後に染筆して贈ったようだ。この詩句は、山号「東明山」を讃え、万国に訪れる希望の春を詠んでいる。戦乱を経験した隠元禅師が、世界に訪れる希望の春—平和—を切に希求した詩偈である。なお福濟寺には木庵書の大型の巻軸三幅「千歳竹」「萬国春」「太古梅」が伝存する。これも世界の平和を願う大きな志を揮毫したものである。

## 三『元亨釈書』と黄檗山萬福寺の開創

その後、隠元は摂津富田の普門寺(現、大阪・高槻市)に移り、三年を経て帰国の意思を伝えたが、引き留められた。普門寺に在住中、万治元年(1658)江戸へ召され、十一月一日に四代将軍徳川家綱に面謁、やがて日本に留まることを決意する。なにが隠元の心を動かしたのか。

隠元は江戸の天沢寺に七十日ほど滞在したが、その間、室内で『元亨釈書』三十卷(虎関師錬著。1322成)を閲覧した。これには「唐・宋より元に及ぶ、一十余位十一宗乗」の渡来僧たちの事歴が記されていた。十一世紀には北宋が衰え、南宋時代には金・元が台頭して国内は社会不安に陥り、鎌倉時代には蘭溪道隆、兀菴普寧ら禅僧の日本渡来が相次いだ。北条時頼に招かれて鎌倉の建長寺の開山となり、鎌倉五山の基礎を築いた。元から渡来した清拙正澄、竺仙梵僊らは臨濟禅の清規と儒学・語録・詩文を勧奨し、南北朝時代には京都の禅林で「五山文学」が盛行した。隠元は、元から渡来した東明慧日禅師の事蹟に関心を寄せ、三世紀半も昔に扶桑に渡って禅を広めた高僧たちの事蹟を想い、渡航後の生き方に大いなる示唆を受け、日本で宣教する覚悟を固めたと推測される。そして将軍家や後水尾法皇の援助寄進を受けて新黄檗山萬福寺(京都・宇治市)開創に至った。

#### 四『三籟集』と『黄檗清規』の編纂

寛治三年(1660)秋七月、隠元禪師は『三籟集』上中下巻一冊を編纂した。「籟」とは三孔の竹笛のことである。大きものを笙、中くらいの籟<sup>らい</sup>、小さいのを簫<sup>やう</sup>という。「三籟」とは、三種の音の響き(『莊子』齊物論篇第二)。

本書は隠元がその生き方を教えられた三人の先人、元の福源石屋和尚、元の嶽林有堂禪師、元の天目中峰和尚の詩を40編づつ三巻に集めたものである。臨済先賢の遺偈や詩偈を読んで修行の教えとした。臨済の基本は言葉を用いて説法する重要性を強調している。詩偈にもその高い文芸性と審美性を求めている。また、寛文十二年(1672)に黄檗派の修行儀式を定めた『黄檗清規』(隠元撰、木庵・高泉校閲)を刊行した。

#### 五「擬寒山詩」の著作

寛文八年(1668)二月、隠元禪師は七十七歳の春を迎えた。すでに松隠堂に退隠し、落ち着いた日々を過ごしている。ある日、「三隠詩集」を読み鳥肌が立つほど心気をうごかされた。「三隠集」とは『寒山詩集』のことで、それに擬して「擬寒山詩」を作った。原『寒山詩集』には寒山の詩306編、豊干の詩2編、拾得の詩55編を収録する。その詩には、寒山・拾得と豊干の日常の奇行と言葉が連ねられている。寒山は天台山の西七十里の寒巖に隠棲する乞食で、国清寺の飯炊きの拾得が食堂の食べ残りを竹筒に貯めておき、寒山が来ると与えた。寒山はそれを背負って帰る。豊干という禪士がいうには、寒山は文殊菩薩、拾得は普賢菩薩で国清寺に身を隠しているのだ、と。

門人の高泉性激(1633~1695)が奥州二本松から訪れ、この「擬寒山詩」の刊行を勧めた。「楮先生(紙)と管城子(筆)」と戯れ、「且つ知らず、余の寒山為るか、寒山の余為るか。惟<sup>た</sup>だ呵呵たるのみ」と、莊周の面影を取り、隠元は身の自在を楽しむ境地を楽しんだ。前年五月には、将軍家綱から白金二万両の下賜があり、黄檗山内には舍利殿が成就した。また、後水尾法皇からの思顧をたびたびこうむり、普照国師の号を授かった。

隠元禪師は東渡後、三年での帰国の約束を果たせず、不本意であったかもしれない。だが、国境を越えてそれを覆うにたる功績を積んだ。状況の変化で運命を翻弄されたが、隠元禪師の東渡は、それを超越して新たな道を開拓した。

- 1, 戦乱を経験したことゆえの世界の平和を願う心、「萬国の春」の到来を希求する視野をえたこと。
- 2, 臨済の黄檗派が登場するまでの仏祖の遺偈・詩偈などの伝統をふまえ、言葉で伝える意義を強く示し、修行の謹厳を示教したこと。
- 3, 晩年の退隠後は、老荘と仏隠への志向が見られ、笑いに包まれた詩情豊かな感性を詩偈として表現した。詩人としても特筆すべきであろう。